

平成28年度 熊本市エイズ総合対策推進会議 議事録

日時 平成29年2月7日(火) 14時～16時

場所 熊本市総合保健福祉センター(ウエルパルクまもと) 4階会議室

出席者: 松下修三委員、前田ひとみ委員、山梨八重子委員、杉野茂人委員、田中弥興委員、赤星頭正委員、○吉村圭子委員(代理:竹田和子理事)、○村上幸一郎委員(代理:小林博事務局長)、濱崎千恵委員、○稲田大志委員、○森山弘子委員、○村上幸委員、丸住朋枝委員、○吉村讓二委員、嶋崎遥委員、○岩瀬茂美委員、紫垣美恵委員、○川口弘蔵委員

欠席者: 椎葉浩亮委員、○川田晃仁委員 (○は新任委員)

1 開会

2 委嘱状交付 議事に先立ち、委員に委嘱状を交付した。

3 健康福祉局長挨拶 健康福祉局長 池田に代わり、保健衛生部長 米納からご挨拶申し上げた。

4 会長・副会長選出 松下委員が会長に、前田委員が副会長に選出された。

5 会長挨拶 松下会長からご挨拶いただいた。

6 議事: 進行 松下会長

(1) エイズの現状と課題

…松下会長から、エイズの現状と課題について配布スライドに沿って説明

【質疑なし】

(2) 平成28年度 熊本市エイズ対策事業計画

…事務局から資料(2～12ページ)に沿って、国、市におけるエイズ及び性感染症発生動向と事業計画について説明。

【質疑なし】

(3) 平成25～29年度 HIV感染及び性感染症の予防対策について

…事務局から資料(13～14ページ)に沿って、市の予防対策について説明。

【質疑応答】

[会長]

5年間の予防対策については、数値に表せにくいものかもしれないが、保健所検査で見つかる方が明らかに増えてきたということが一番の実績かと思う。様々な理由があると思うが、少なくとも保健所で安心して検査が受けられることがリスクグループの方々には伝わってきた結果ではないか。それはこれまでの5年、10年前からの地道な努力が今出てきている可能性がある。

(見つかっている方の)年齢は必ずしも若くないが、若年層のMSMの方々には24歳くらいまでは(自身のセクシュアリティ(性自認など)について)揺れ動いていることが多いので、検査に中々行かないということが言われている。彼らが気軽に検査に行けるような保健所であってほしい。リスクのない方が多く利用するのではなくて、リスクのある方がむしろ定期的に受けられるような体制が望ましい。

[熊本大学大学院生命科学研究部（前田委員）]

検査を増やすということが先ほどから出ているが、自分自身には関係ないと思っている人がほとんどで、自分が感染しているとは思っていない。その辺に対して良い案があれば伺いたい。今、若い人たちへ向けての啓発をやっているが、中々、自分のこととしては受け入れられない。

[会長]

永遠の課題でしょうか。どんな病気もそうだが…乳がんになられた歌舞伎役者の奥さんもそうだろうと思うが…その病気といわれたときに、自分のことだとは思えない。

気軽には難しいと思うが、外国に行くと、地下鉄などに「H I V検査に行きましょう」と大きく張ってあったりする。日本ではあまり見えない感じがする。もっと明るくするといいし、イメージを変えないといけない。20代の方が見るようなイメージのキャンペーンをすることが重要。

[熊本大学教育学部（山梨委員）]

検査に気軽に行くためにどういう取組みをするかという話があったが、東京では地下鉄があり、熊本市には市電がある。市電の中の広告を張っているようなところに、チラシを並べて2つ重ねて張るだけでも力になると思う。バスとか電車とか、同じ行政のつながりがとりやすいところに積極的にアプローチするのも一つの手ではないかと思う。

[事務局]

市電については、以前から交通局の方に良くしてもらっていて10cm×10cmサイズの検査案内のステッカーを車内に貼ってもらえないかと交渉したところ、快く引き受けていただいた。現在、全車内に貼ってもらっている。あまり目立たないのかもしれないが…乗降口の近くでつり革を持って立つとちょうど、「保健所のエイズ検査は無料匿名」というのが見える。また、熊本県バス協会にも可能な範囲でのご協力をお願いして、全バス会社へステッカーを配布させていただいた。こちらは、会社によって貼っていただいているところと、貼っていないところがある。中学生や高校生から、「ステッカーを見たよ」という声を聞くことがあり、効果を実感している。

[会長]

（この5年計画は）29年度までの対策なので、次の5年間はどうするかも考えなければならない。ちょうど予防指針を改定するので柱が変わってくる可能性はあるが。

[熊本市薬剤師会（赤星委員）]

他のアイデアとして、復興城主になると飲食店で割引が受けられるなどの取組みがあるが、たとえば、居酒屋さんにこの（H I V検査の）チラシがあつて、画像を読み込んでレジに持っていくと生ビール1杯無料など何か特典が受けられるなど、飲食店の協力を受けられると何か変わるのかなと思う。東京の方で、飲食店の突き出しを全部野菜に変えてくれと行政から働きかけた区

があり、コレステロール値が有意に下がったという話を聞いたので、飲食店でサービスを受けられるなどするともっと目に付くのかなと思う。

[熊本県私立中学高等学校保護者会（瀨崎委員）]

子どもがよくスマートフォンで色んなアプリをとって遊んでいる。子どもが個人でスマートフォンにアプリを取り込んで自分の体の気になるところを調べたりできるような、すでにある女性専用のアプリのように、ゲーム感覚で自分の体のメンテナンスをできるようなものがあればいいのかなと思う。

[熊本県弁護士会（丸住委員）]

私達の年代は中々病院にもいかないし、エイズだけで検査に行くというのは時間も惜しい。病気にして病院で血を抜いてもらうときについでに検査してもらえるといい。

[会長]

今でも（病院で検査）できるが、自費で、匿名でもない。本当は当たり前にならないといけない。名前を出して、少し（自治体の）補助がある程度で検査を受けるような仕組みが正しい。日本では陽性率が低いので採用されていないが、サンフランシスコなど陽性率が高い地域では拒否されない限り検査できるという「オプトアウト検査」を行っているところもある。

日本でも、痰のからまないような咳だとカリニ肺炎（ニューモシスチス肺炎）が考えられるため、微熱が続くよう原因がわからなければ「H I V検査をしてみましようか」と医師から気軽に言えるような雰囲気になったらいいと思う。考えてみるとその方がいい。患者さんは早く治療した方がいいのだが、（日本は導入が）遅れている。これはいくら私が声を大きく言っても駄目で、厚生労働省の方からそのような指導を各医師会などにしていけないといけない。これは、今、申し入れているところ。先生（丸住委員）のおっしゃるとおりで、病院での検査を増やすと、40、50代などまだまだ現役の方から早く見つけていけて（結果として）感染が減る。これはとても大事なポイント。熊本市だけではなく、全国的に考えなければいけないことである。

#### （4）トピックス「H I V／A I D S患者の地域での療養支援への取組み」

熊本大学医学部附属病院 地域医療連携センター 看護師長 井原 国代 氏

**【趣旨説明（会長から）】**

患者さんは一生薬を飲まないといけないし、色んなバックグラウンドを抱えているから生活の支援が非常に重要になる。長期療養が大事で、患者さんのフォローアップも“薬を出して注射して終わり”ではない。熊本大学医学部附属病院でも地域連携に力を入れており、平成27年4月からエイズ患者の地域での療養支援への取組みや医療関係者・教育関係者などへの出前講座など新たな側面からエイズ患者の抱える問題に関わっておられるので紹介いただく。

**【内容】**・・・配布スライドに沿って取組みを紹介。

**【質疑応答】**

[熊本市歯科医師会（田中委員）]

歯科診療での話があったが、歯科医師会として、患者さんへの対応について普及啓発をしているので安心してかかってほしい。問診で書いてもらうようにしているが、自分自身、歯科医になって30数年、お会いしたことがない。B型肝炎などの方のほうが大多数なので、会員一同、防御（標準予防策）をしながら対応しているので安心してご相談いただければと思う。

[熊本県看護協会（竹田理事）]

熊本県看護協会では2つ訪問看護ステーションを持っている。熊本と長洲にある。長洲の方で、昨年、福岡の病院からエイズ患者さんの受け入れについて話があり、勉強会に参加させてもらい、受け入れた。安心して利用していただければと思う。

[会長]

（医療機関等での状況は）少しずつ良くなっている。明らかに。歯科治療の方も、必ず、患者さんが行っていると思ってください。歯科で感染した事例はないので皆さん安心して行っているし、患者さんも行っているということ。しかし、本人にこだわりがある（ので利用が進まない）ということもあるだろう。

[井原師長]

ありがとうございます。そのように患者さんたちにも伝えたいと思う。

訪問看護ステーションに関しては、在宅訪問の受入れが良好でほぼ断られたことがない。やはりハードルが高いのは介護施設。医療機関もだが、介護施設かなと思っている。ヘルパーさんたちにどう介入していくのが、直近の課題である。

[熊本大学大学院生命科学研究部（前田委員）]

連携という話で、検査をどう増やしていくかという話に戻ると、口腔のカンジダ症とかも疾患の前兆になる。口腔外科や歯科にかかったときに、歯科の先生から、カンジダの症状などがある患者さんには病院に行ってみたらどうですかとおすすめていただけるとつながっていくのではないかなと思う。

[熊本市歯科医師会（田中委員）]

中々、カンジダ（口腔カンジダ症）の方は病院で見かけない。ひどい方には勧めることがあると思うが、私はあまり経験がない。今後ともそのあたりについて検討しておく。

[会長]

最後の方で重要な話があった。それはLGBTの教育について。エイズ学会の方でも申し入れようとしているがそれをして無駄だという意見もある。人権教育はするが、性的指向については学校ではあまり話さないことになっていると聞いた。今日はPTAの方も来ているが、PTAが反対するからだということも聞く。しかしその時代ももうすぐ終わるんじゃないかなと思う。日

本も世界に開かれた国というか、LGBTに関しても Living Together<sup>※</sup>、もう一緒に生活しているわけだからそのように受け入れていく社会になっていくし、学校教育が一番遅れているというわけにはいかないだろうと私は考えている。しかし、中々動きが鈍いというのが現実。

それから、自殺企図があるという話。性同一性障害の方は自分の性（セクシュアリティ）について常に揺れ動いているという精神的に不安定な状況もあって、実は養護教諭の先生達が一番苦労されているところ。精神科医がすぐに診てくれればいいが精神科のハードルが高いので中々行かない。そうになると、学校のカウンセラーが非常に重要になってくる。カウンセリングが一つの大きなテーマになるだろう。

〔※事務局注：Living Together とは、「HIVをもっている人も、そうじゃない人も、僕らはすでに一緒に生きている」というメッセージの元、2002年にHIV/エイズ支援を行っている東京の団体等が始めたキャンペーンの名称及びキャッチコピー。〕

#### (5) その他

##### 【総合意見・質疑応答】

〔会長〕

今日の事務局からの話では来年度の計画についてなかったが、このままいくということか。アイデアはいくつか出たが、目標は出てこなかった。陽性の方が検査で見つかっているのだから、熊本市のこれまでの取組みにある程度の成果があるとみているし、今日、委員の皆様もお帰りになってコミュニティの中で話していただくと思うけれど、やはり、症状がない状態で見つかることや、症状が出る前に検査を受けてもらうことが大事だということを確認していただきたい。

そのような中で、来年度の取組みをどう考えているか。

〔事務局〕

来年度も2本柱での取り組み、普及啓発では特に青少年、MSMへの教育や啓発を力を入れるべきだし、一般の方への理解促進というのもこれまでどおりできる範囲で続けていきたい。

検査相談についても、現在窓口を狭めているところだが、年数回の特例検査を行うなどより利便性の高い検査を取り入れるなどしてその部分をカバーできればと考えている。来年度の具体的な活動については今後検討していく。

また、今年度から委員になっていただいている Safety Blanket の川口代表と連携し、また、前田ひとみ先生のところの大学生グループくまびあともタッグを組んで、より濃密でコンパクトに効果のある方法を選んで取り組んでいけたらと考えている。

〔会長〕

「選択と集中」ですね。これまで効果があっていることがわかっているので続けてほしい。

〔Safety Blanket (川口委員)〕

熊本でゲイ支援サークル「Safety Blanket」をしている。今日色々な方向からのお話を聞きながら自分に何ができるのかを考えていた。「リスクグループ」という話があったが、じゃあ自分た

ち同性愛者の中で、誰がリスクが高いグループかという、正直、区別というのはないのかなど。例えば好きな人ができたり行為を持ったり、愛情表現の一つにリスクが潜んでいるということで、全体的に皆注意しなきゃいけない問題だと思っている。

10代の子達には、保健所で検査があるときなども、自分（川口委員）がSNSを使って情報を広げている。どこまで目に見える効果があるかはわからないけれども。例えば今後、サークルでの勉強会などで、「HIV／エイズだけの勉強会」としてしまうと敷居が高くなってしまうので、プラス性病などの勉強会もするから、一度だけでも来ておいて損はないよとうまく若い世代に伝えるとか、40代、50代に限定した勉強会や交流会を設けることで、若い人が来るなら来にくいという意識の人にも参加してもらえる工夫を心がけながら活動を続けていきたいと考えている。

中々数値として目に見えにくい活動と思うが、これは継続することに意味があると思うので今後とも協力していただきたい。

[熊本日日新聞社（岩瀬委員）]

若い人たちにどう届けるかという話が出ていたので、去年していることを見ていたら、映画のイベントがあったのでなるほどと思った。「学び」というところではじまると入ってこないの、「共感」というワードがあると伝わるのかなと思う。映画や音楽、アートの世界にHIV／エイズに意識の高い表現者がいらっしゃるので、そのような方々と組み合わせたイベントをすればどうか。また、よくスマートフォンが出てくるが、スマートフォンを活用した方法、例えば熊本市の動物の殺処分の話などは、何らかの方法で「ピンチです」とかいう情報がよく届いてくる。スマートフォンからフェイスブックなどの発信性の高いものの活用で、無関心な人まで届くのではないか。

手法としてはそのようなことを考えたが、先ほどの病院の話聞いて一番訴える力があるのは患者さんの思い、患者さんの人生、家族の思い。そういったものを伝えることなんだとあらためて思った。熊日ではLGBTの取材を定期的に続けているが、今後も当事者の思いを何らかの形で、ハードルも高いが、努力して続けていきたいと思う。

[会長]

今年はたくさん患者が見つかった。症状がなくて見つかったので、もしかしたらこの状態が何年か続けば、熊本市で、終息宣言まではいかないかもしれないが、少なくとも減っていく可能性があることも考えられる。そういった意味で、今後の対策や動向に委員の皆様のご意見を活かしていければと考える。

～議事終了～

## 7 閉会